

「起壊を考察する第二十一章」

時が本性として有る理由を否定する>時は果が生起し失壊する因であることを否定する> [章の著述を説く]

ここに言う。「時は本性としてまさしく有る。(何故ならば) 生起と壊の因である故である。ここで、芽等は或る時間をもとにして起こり、生じるとなるが、或る特化した時間をもとにして壊れ、尽く壊れるとなる。因と縁の集合は有ろうとも、一切の時間においてではない。それ故に、時はまさしく有る。(何故ならば) 生起と壊の因である故である。」

章の著述を説く>生壊が本性として成立したことを否定する>起壊が本性として有るという主張命題を否定する>起壊は一緒にあるかないかを考察して否定する> [主張命題を挙げる]

述べよう。もし、生起と壊そのものが有るならば、時は生起と壊の因そのものとなろうが、(それは) 有るのではない。如何様に無いのかを示す為に、

壊は、生起が無くしてか、
一緒にまさしく有るのではない。
生起は、壊が無くしてか、
一緒にまさしく有るのではない。 1

と説かれ、ここでもし、生起と壊が有るとなれば、互いが無くして有るか、一緒に存在するものとなるが、尽く分析考察したならば双方の如くとも有るのではない。

起壊は一緒にあるかないかを考察して否定する>理由を示す> [失壊は生起と一緒にある・一緒にないことを否定する]

「如何様に？」といえは。

そこで、壊れる様相である壊が、如何様に起こる一生じること無く有るのではないかを示す為に、

壊は、生起無くして、
如何様に有るとなろうか。
生まれることなく死ぬことになる。
壊は、生起無くして無い。 2

と説かれ、壊れる様相である壊は、生起無くして如何様に有るとなろうか。「如何様に」という言葉によって、全くあり得ないと公認されることを示す。「如何

様に有るとなろうか—それは有るのではない。」というお考えである。

またもし、「生起無くして壊が有るとなれば、如何なる過失となるのか。」といえは。

述べる。

「生まれることなく死ぬことになり、
生まれていないものが死ぬとなるが、生まれていないものに死ぬことも見られない。それ故に、壊は生起無く存在するに適わない。

ここで、「偈の前半で主張命題を挙げるが、間の行で背理を論立させたのであり、最終行によってまとめたのである。」と知りたまえ。

そのように先ず、生起無くして壊れることは正理ではないと示して、ここで壊は生起と一緒に、如何様に有るのではないかを示す為に、

壊は、生起と一緒に、
如何様にまさしく有るとなろうか。
死は生と同一時に、
まさしく有るのではない。 3

と説かれ、もし、壊が生起と一緒に—同一時に一度に有るとなれば、そのようであれば死と生が同一時となるが、互いに反するその二つは光と闇のように同一時にも有るのではない。それ故に、「壊は、生起と一緒に成立したことが有るのではない。」とおさまる。

「ある時、そのように壊は生起無くして、あるいは一緒に成立したことが有るのではないが如く、生起も壊無くしてか、一緒に成立したことは有るのではない。」と示す為に、

生起は、壊無くして、
如何様にまさしく有るとなろうか。
諸事物において無常性は、
いつ時も無いのではない。 4

と説かれた。生起は、壊無くして（有ること）はまさしく正理ではない。何故ならば、生起する主体、生じる主体である諸事物において、無常性はいつ時も無いのではない。ならば何かといえは、一切の時に有るのであり、

「一切の事物は、何時も、老い死滅する法（現象）であるならば、老と死無く、住す事物は、何ものであるか。」¹

と説かれた。

そのように、一切事物が常に無常と関係する時、壊と離れたとなったものの場合が何かしら有るとも何処でなろうか。それ故に、壊無くして生起があり得ることは、有るのではない。

そのようであれば、先ず、生起は壊無くして有るのではない。

これらの残余の分析は「有為を考察する」において既に分析した故に、再度分析しない。

ある者が「壊は、因と共にある。（何故ならば）有為の性相である故であり、生の如くである。」と理由を挙げたことを取り上げて述べて、「最終の心と心所の性相を例として、不確定因である」と言うことは、不適正に言及したのである。（何故ならば）その壊もまさしく生の縁を持つものであることによって、因と共にある故と、主張命題と等しい故に、不確定そのものが無い故である。

何かまた、

「事物の我性の自性が、起こっていないものより起こったことによって『生』といい、それ故に、実質として有る諸物は生じると成立した故に、世俗としても喩例は無いのである。」²

と示したことも正理ではない。（何故ならば）影像等の実質として無い諸物をまさしく因と共にあると承認した故である。

阿闍梨の御言葉より、斯くも

「因より起こったもの。それが無い故に無いもの。それらは映像に等しいと、明らかであり、見るままに認めない。」³

と説かれた。それ故に、世俗として喩例が成立していないことが何処に有ろうか。

もしまた、「事物より、まさしくそれ（自）かまさしく他であると述べる事ができないものは、世俗としても有るのではない。」と言えば。

1 「一切の…あるか。」：『根本中論』第 7 章 24 偈。

2 「何もの…である。」：『般若灯論』『起こっていない事物より起こることによって事物の我性を得ること自体を『生』といい、世俗としても起こっていない事物そのものより起こるので、生は実質として成立していない故である。』ということは、先にある対論者たちが『例えば、生の如くである。』といったその喩例は世俗としても成立していないと示した。（テンギユル/デルゲ版 dbu ma/za 302 頁 1~2 行）

3 「因より…ない。」：？

「青色等も有るのではない。」と述べる。斯くも、

「形色の事物は名前のみである故に、虚空も名前のみである。基本構成要素が無い形色のようなものが、何処に有ろうか。それ故に名前のみでもある。」⁴

と説かれた。

他にも、「生」となる何かの時間的な特性は、中観派達にとって、事物自らの本質が有ると何処でなろうか。それ故に、喩例が成立していないと述べることは、まさしく正理ではない。

何かまた、

「壊は因と共にあるのではない。(何故ならば) 壊をまさしく具えない故に、例えば無為の如くである。」⁵

と言う、その言説者にとっては、この理由によって大きな矛盾を引き起こすのである。斯くも、この理由が壊を無因であると論立させるように、有為の性相ではないことも論証する。その如く、行蘊に含まれたものと、縁起生の支分に含まれたもの等一切も矛盾させるので、これは適正ではない。

その如く、「識は対象自体の本質を肯定認識するものではない。(何故ならば) 識を具えない故に、無為の如くである。」等によって一切を否定した故に、これについて大きな不都合が成立したとなるので、これを認めてはならない。

理由を示す> [生起は壊失と一緒にである・一緒にないことを否定する]

ここで、如何様に生起は壊と一緒に成立したことが有るのではないかを示す為に、

生起は、壊と一緒に、
如何様にまさしく有るとなろうか。
生と死は同一時に、
まさしく有るのではない。 5

と説かれ、もし、生起が壊と一緒に有るとなれば、その時、生と死はまさしく同一時となるが、(それは) あり得ることでもない。それ故に、生起と壊は、まさしく一緒に成立したことも有るのではない。

4 「色形の…ある。」:『宝行王正論』第 1 章 99 偈。「色形の事物は名前のみである故に、虚空も名前のみである。構成要素の無い色形の如くは何処に有ろうか。それ故に名前のみも無い。(パツァブ訳)」

5 「壊は…である。」:『般若灯論』テンギユル/デルゲ版 dbu ma/za 300 頁 7 行。

『仮に、生と死は一つの本質か、別の本質として成立したことが有るのではないと見るとしても、生起と壊は有る。(何故ならば) 述べられるものである故に。識の如くである。』と思えば。

述べよう。もし、まさしく述べられるものであることによって、それらが成立したと主張するならば、石女の子も主張したまえ。

起壊は一緒であるかないかを考察して否定する> [それらの意味をまとめる]

他にも、

互いに一緒か、
互いに一緒ではなく、
成立したものは有るのではない。
それらの成立が、如何様に有ろうか。 6

それから生起と壊が成立するとなる、まさしく一緒か、まさしく一緒ではない以外、他の方向は無い。

『まさしく言い表せないものとして成立したとなるだろう。』と思えば。

「言い表せない」というこれは何か。もし混ざったものであるならば、それは不合理である。(何故ならば) それぞれに成立していないものにおいて、混合となったものは無い故である。

「言い表せないとは、確実に捉えられることの無い本性そのものである。」といえ。

そう見るならば、「確実に捉えられるものとして無い自らの本質である故に、まさしく石女の子の蒙古班と白い尻等のように、生起と壊は有るのではない。」となるだろう。そのように、生起と壊が有るのではない時、「それらの因である時も無い。」と成立した。

起壊が本性として有るという主張命題を否定する> 起壊は如何なる拠所に有るか考察して否定する>

[尽・無尽である拠所において起壊を否定する]

他にも、「ここにそれら生起と壊を考察すれば、尽きた主体である事物におい

てか？尽きていない主体においてか？と考えれば、双方の如くとも不合理である。」と示す為に、

尽きたものに生起は有るのではない。
 尽きていないものにも生起は無い。
 尽きたものに壊は有るのではない。
 尽きていないものにも壊は無い。 7

と説かれた。そこで、尽きた一尽きた主体である事物においては、相反する法（性質）が有るので、生起は適正ではない。事物の性相を具えぬ故に、尽きていないものにおいても生起は適正ではなく、ロバの角の如くである。

その如く、尽きたものに壊失は有るのではない一尽きた主体とは無であり、それに所依（拠所）は無い故に、壊は適正ではない。その如く、尽きていないものにも壊は無い。（何故ならば）尽きていない主体である事物は、事物の性相と合致しないのである。有るのではないそれに、壊が有ると何処でなろうか。

尽きた・尽きていない主体である事物においてあり得ないそれら生起と壊は、まさしく有るのではなく、それ故に生起と壊は無い。

起壊は如何なる拠所に有るかを考察して否定する＞ [事物である拠所において起壊を否定する]

ここで言う。「諸事物の生起と壊はまさしくある。（何故ならば）それらの拠所である主体がある故である。ここで、生起と壊は事物に依拠したのであるが、その事物も、先ず有るのである。それが有るので、それに依拠した諸法（現象・性質）も有るとなる。」

述べよう。もし事物があるならば、事物に依拠したその二つの法（性質）は有るとなるけれど、事物が有るのではない時、

事物が有るのではなく、
 生起と壊は有るのではない。

また「何故に事物が有るのではないのか。」といえ、このように

生起と壊無くして、
 事物は有るのではない。 8

生起と壊は、事物の性相となるのであるが、それらは否定した。否定した時、

事物の性相である生起と壊無く、事物の性相と合致せずには有ると何処でなろうか。事物が無ければ、生起と壊も有るのではない。

他の者が、「生起と壊は有るのである。(何故ならば) 事物の法 (性質) が有る故である。ここで、有るのでないものにおいては、事物の法 (性質) は無く、例えば蛙のたてがみの如くである。生起と壊の二つは、事物の法 (性質) でもある。それ故にそれらは有る。」といえ。

ここで述べよう。もし、何かに勝義として生起と壊が有るならば、それは「事物」と述べられるに適正であるとなるが、それらは無い。それ故に

「生起と壊無くして、事物は有るのではない。」

— 『事物とは、生起と壊が有れば、まさしく有るのである故である。』というお考えである。それが無ければ、まさしく不定因⁶の意味である。

その如く、

「事物が有るのではなく、生起と壊は有るのではない。」

「『所依 (拠所) が無いので能依 (依るもの) は成立していない。』とお考えになられた。」と、上半分と下半分にして解説する。

起壊は如何なる拠所に有るかを考察して否定する > [空・不空である拠所において起壊を否定する]

他にも、ここでそれらの生起と壊を考察すれば、空である事物か？空でないものに (依拠する) か？と問えば、「双方の如くとも不合理である。」と示す為に、

空において、生起と壊は
まさしく合理ではない。

と説かれ、『拠所が無い故に、虚空の絵の如くである。』というお考えである。その如く、

不空においても、生起と壊は
まさしく合理ではない。 9

空ではないものに有る本性を持つものである故に、拠所が無いので、生起と壊は合理ではない。

⁶ 不成因：主張命題の主語に対して、合致して成立しない理由。

起壊が本性として有るという主張命題を否定する > [起壊は同一か別かを考察して否定する]

他にも、「もし生起と壊が有るならば、それらはまさしく同一か、まさしく他として有るものであるが、双方の如くとも不合理である。」と説かれたのは、

生起と壊が、
まさしく同一であるとは不合理である。

光と闇のように、互いに反するものらは、まさしく同一であるとは不合理である故である。

生起と壊は、
まさしく他であるとも不合理である。 10

二つとも互いに誤らない故である。生起と離れて壊は適わぬが、壊と離れて生起は見られない。そのようであれば、二つとも互いに誤らぬ故に、

「生起と壊は、まさしく他であるとも不合理である。」

生壊が本性として成立したことを否定する > 起壊が本性として有る理由を否定する > [「見える」は理由にならない]

『何を。この詳細な考察が何をしようか。何故ならば、牛飼い男や女性からが生起と壊を見る故に、生起と壊は有るのであり、有るのではない石女の子は見られ得ない。』と思えば。

もしそのように、

生起と壊は、
見えると君が思うならば、

これは不確定であり、何やかやと世間人が見るそれやそれは、まさしく有るのではない。このように、牛飼い男や女性からが、有るのではなくとも尋香の都や、幻や、夢や、回転する火の輪や、逃げ水等を見る。根（感覚器官）が傷つけられたことより眼障を持つ者にとっての落髪や、蜜蜂や蠅の嘴等を見るのであり、その如く「生起と壊も無いながら、無知の愚痴の眼障が心の眼を衰えさせたので、見られるのである。」と説く。

生起と壊は、
まさしく愚痴によって見られるのである。 11

という。

起壊が本性として有る理由を否定する>その理由を示す> [起壊は自らと同種・異種より生じることを否定する]

「何を。『有るのではない自らの本質を持つこれら生起と壊は、愚痴のみによって見られるのである。』というこれは、そのように何によって確認するのか。」
といえは。

これはそのように正理によって確認するのである。

ここで「如何なる正理であるか。」といえは。

ここでもし、「事物」という何かが有るならば、それは確実に事物か、無事物より生じるものである。その如く、もし「無事物」という何かが有るならば、それも事物か無事物より生じるものであるか？と問えば、「二つとも、双方のようにも有るのではない。」と説かれた。

事物は事物より生じず、
事物は無事物より生じない。
無事物は無事物より生じず、
無事物は事物より生じない。 12

先ず、事物—「正しく生起する」というものは、事物—正しく生起するものより生じることは有るのではない。(何故ならば) 因果の二つが同時であることは無い故と、既に生を得た生においても、生じることは無意味である故である。

事物は無事物よりも生じない。何故かといえは、「無事物」とは壊れ、尽く壊れるのであるが、それも事物と反するのであり、事物と反する故に、それより事物が如何様に起こるとなろうか。もしなるならば、石女の娘からも子が生まれるとなるだろう。それ故に、事物は無事物よりも起こるのではない。

ここで、無事物も無事物より起こらない。無事物とは事物が無くなった本性を持つものであり、それ故に、それに果を生じさせる能力が何処に有ろうか。もし有るならば、涅槃にも果を生じさせる力が有るとなるだろう。

もし、無事物より無事物が起こるとなれば、その時は石女の娘からも子が生まれるとなるが、それはそのようでもない。それ故に無事物は、無事物よりも起こるのではない。

ここで、無事物は事物よりも起こらない。無事物とは事物と反するのである

が、それが如何様に事物より起こるとなろうか。もしなるならば、灯明よりも闇が起こるとなるだろう。

「何故ならば、そのように尽く分析したならば生起と壊は有るのではない故に、まさしく愚痴によって見られるのである。」と知りたまえ。

一様相においては、この対論は他である。このようにここで、もし生起と壊が有るならば、それらは事物に依拠したか、無事物に依拠したとなるものであるが、事物と無事物の二つを尽く分析したならば、一切において有るのではなく、それ故に拠所が無いので、生起と壊が何処に有ろうか。それ故に、

「生起と壊は、まさしく愚痴によって見られるのである。」⁷

と知りたまえ。

事物と無事物の二つが如何様に有るのではないのかを示す為に、

「事物は事物より生じず、事物は無事物より生じない。無事物は無事物より生じず、無事物は事物より生じない。」

と説かれ、この意味は上記の如くである。

その理由を示す> [事物は自と他より生じることを否定する]

他にも、もし「事物」という何かがあるならば、それは生じ、尽きたことを具えるので、起こり、壊れるとなるけれど、事物とは何も有るのではない。(何故ならば) ロバの角のように、本性として生じていない故である。

「生じていないこと自体成立していない。」といえよ。

成立していないのではなく、このように、

事物は我より生じず、
まさしく他より生じるのではない。
我と他より生じることは、
有るのではない。如何様に生じるとなろうか。 13

これは、第一章において既に解説した故に再度説明しない。

何故ならば、そのように、斯くも説かれた諸様相によって生があるのではない故に、それは如何様に生じるとなろうか。『如何様にも、まさしく生じるとはならない。』とのお考えである。

「事物が生じることは、一切の様相において有るのではない。」というこれを、

⁷ 「生起と…である。」:『根本中論』第 21 章 11 偈。

そのように迷いなく承認したまえ。

章の著述を説く>生壊が本性として成立したと主張すれば、恒常と断滅の過失であると示す>

[事物が本性として有ると承認すれば、恒常と断滅になるさま]

そのようであれば、

事物が有ると承認したならば、
恒常と断滅の見解となる
背理となる。

何故ならば、

その事物とは、
恒常と無常になる故である。 14

事物の構成を斯くも説かれたものより逸脱して、事物であるとの見解を承認するものは、疑い無く、善説と非常に反する恒常と断滅の見解となるだろう。

何故かといえば、何故ならばその事物を考察したならば、恒常のものか？無常のものになるのか？と問う。もし恒常であるならば、その時には恒常であると語ることになるが、あるいは無常であるならば、その時には確実に断滅を語るとなるだろう。

生壊が本性として成立したと主張すれば、恒常と断滅の過失であると示す>そのように承認しながらもその過失を斥ける返答を、否定する> [本性として成立したことを承認して恒常と断滅を斥ける論法]

ここで言う。

「事物が有ると承認したとしても、
断滅にならず、恒常にならない。

何故かといえば、斯くも、

果と因の生起と壊の、
その継続が有である故である。 15

因と果の生起と壊の継続であるものが、我々の有一輪廻である。
そこでもし、因が滅してその因を持つ果が生じなければ、その時断滅となり、

もし因が減さずに自らの本質として留まるならば、その時恒常の見解となるけれど、それはそのようでもない。それ故に、事物を既に承認したとしても、恒常と断滅の見解の背理が有るのではない。因と果が途絶えぬ様相として順次に起こるものである、諸行の生起と壊の継続そのものが輪廻であり、それ故に、我々にこの過失が有るのではない。」

そのように承認しながらもその過失を斥ける返答を、否定する>それを否定する返答>

[継続を承認しようとも恒常と断滅は斥けられない]

述べよう。もし、

果と因の生起と壊の
その継続が有であるとなれば、

そう見るとしても

壊に再び生じること無き故に、
因は断滅する背理となる 16

のではないか？生じさせられる果に対して因となって滅す因の刹那は、壊を具える因の刹那も生じない故に、断滅の見解となるだろう。

「君にこの過失があると、どうしてならないのか。」といえば。

事物を承認する者にとってはこの過失になるが、吾輩は事物を承認していない。(何故ならば)一切の法(現象)は生が無い故である。斯くも

「何か依拠して何かが起こる。それは先ず、まさしくそれではない。

それより他でもない故に、それ故に断滅ではなく、恒常ではない。」⁸と説かれた偈においても、吾輩がこの論法によって諸事物は本性が無いと示したのである。そう見るのではなく、事物が自らの本質として有るならば、種子と芽はまさしく他であると如何してならないのか。それ故に、この背理は我々を批判するものではない。

そのように先ず、事物が有ると承認すれば因も生じることが無い故に、断滅の見解の背理となると述べて、ここで恒常の過失の背理を述べる為に、

⁸ 「何か…ない。」:『根本中論』第 18 章 10 偈。

事物は自性があるならば、
無事物となることは正理ではない。

と言う。もし因が本性として有るとなれば、それは後に有ではないとならない。
(何故ならば) 本性に退転は無い故である。それ故に、恒常であるとする背理はそのまま残る。

他にも、

涅槃の時には断滅する。
有の継続が良く寂滅する故である。 17

もしまた、因と果の生起と壊の継続が(続き)入ることによって、恒常と断滅であるとする背理を捨て去るとはしようが、そう見るとしても、そこにその継続も起こるとならない涅槃⁹においては、確実に断滅の見解となるだろう。世尊は、断見を捨て去るように説かれた。

「そのような様相は、断滅の見解であるとはならない。」といえよ。

君にとって、他についても何故そうであるとなろうか。『涅槃の時に事物は尽く断滅すると認識するように、事物が尽く断滅することを認める故である。』と思惟された。

それを否定する返答> [継続そのものが本性として成立していないと示す]

何であろうと、

「果と因の生起と壊の、その継続が有である故である。」¹⁰

と言ったことも不合理である。如何様とといえよ、ここで最終有(最終輪廻)とは、退転する性相を持つものであるが、最初とはまさしく衆生が入胎する性相を持つものである。そこで、滅しつつある最終の有とはまさしく因として留まるのであるが、生の性相を持つ最初の有は果の本質として留まるのであり、その二つの有に「輪廻」という名を付けたのである。

ここでこれが分析される。何かより因と果の継続によって輪廻となる、果の

⁹ 涅槃: ここでの意味は無余涅槃^{むよねはん}といい、有為の継続の残余の無い涅槃。阿羅漢が解脱を得たのち、亡くなった状態。無余涅槃を得て、身体だけでなく意識の継続も無くなると主張する説と、身体を離れても解脱を得ている意識は断滅しないとする二説ある。ここでの対論者は前者。

¹⁰ 「果と…である。」: 『根本中論』第 21 章 15 偈後 2 行。

自性として尽く留まる最初の有であるものは、最後の有が滅したか、あるいは滅していないか、それ一滅しつつあるならば生じるのか？「尽く分析したならば、一切の様相において有るのではない。」と示す為に、

最後が滅したとなれば、
最初の有は正理とならない。
最後が滅したとならない時、
最初の有は正理とならない。 18

と説かれた。そこでもし、「最後の有が滅したならば、最初の有が生じる。」と考えるならば、その時は無因となり、燃え尽きた種子よりも芽が生えるとなるけれど、それを主張するのでもない。それ故に、最後が滅したならば、最初の有（がそれから生じること）は正理ではない。

ここで、最後の有が滅していなくとも、最初の有（がそれから生じること）は正理ではない。もし（正理と）なるならば、無因であることや、一有情に二つの本質が有ることや、以前に無い有情が現れることや、前世がまさしく恒常であることや、失壞していない種子より芽が生えるとなるが、それらはそのようでもない。それ故に、

「最後が滅したとならない時、最初の有は正理とならない。」

ここで、最後の有が滅しつつあるとしても如何様に最初の有が不合理であるかを示す為に、

もし、最後が滅しつつある時、
最初が生じるとなるならば、
滅しつつあるとは一となり、
生じつつあるも他になる。 19

と説かれた。そこで、「滅しつつある」とは現在である。（何故ならば）現在の状態である接尾語によって述べられる故である。「生じるとなる」ということによってもまさしく現在を述べる。（何故ならば）現在形の言葉の叙述内容である故である。

あるいは「滅しつつある」とは、滅す行為の行為者であるが、「生じるとなる」ものも生じる行為の行為者であり、それらを同一時であると主張するならば、同時に有るとなるだろう。それ故に、「滅しつつある」とは一つの有となり、「生じつつある」も他となるので、二つの有がまさしく同一時であるとなるが、一つにおいて同時に二つあるのでもないの、これは正理ではない。

生壊が本性として成立したと主張すれば、恒常と断滅の過失であると示す> [そのように否定した意味を要約する]

それ故に、そのように斯くも説かれた分析方法によって、

もし「滅しつつある」と「生じつつある」が、
一緒であるとも正しくなければ、
死ぬとなる或る蘊において、
それに生も起こるとなるのか？ 20

「も」という言葉は含む意味である。(何故ならば) それらをそれぞれ各々に置かせる故である。ある時、そのように斯くも説かれた論法で、最後が滅したならば最初の有は起こるのではなく、最後が滅しておらずに最初の有が起こるのではない。しかし、最後の有と一緒に同一時にも最初の有は生起するのではない。これは、

「死ぬとなる或る蘊において、それに生も起こるとなるのか？」

死ぬことになる、それら蘊であるものに留まるもの自体に、「生」というこれは、非常に矛盾する。このように「死につつある」ものは、生じると見られない。

それ故に、

そのように三時においても、
有の継続が正理でなければ、

何故ならば、滅した、滅していない、滅しつつある最後の有は、最初の有が有るのではない故に、三時ともにも有の継続は有るのではない。

三時において無いもの、
それが如何様に有の継続となろうか。 21

三時において有るのではないものは、他の我性によって有ると何処でなろうか。それ故に、一切の様相において有の継続は有るのではない。それ故に、

「果と因の生起と壊の、その継続が有である故である。」¹¹

と言ったそれは、誤りを言ったのである。

それ故に、事物が有ると承認すれば、恒常と断滅の見解である背理そのものが斥けられることは難しいのである。

それ故に、「諸事物は生が無い。」と成立した。

¹¹ 「果と…である。」:『根本中論』第 21 章 15 偈後 2 行。

頭句論 [第 21 章]

時は果が生起し失壞する因であることを否定する＞ [了義の教証と合わせる]

世尊によっても、

「三有は夢に似て精髓は無い。速やかに壊れ、無常であり幻の如く。来
ることは無く、ここから行くことも無い。諸々の流れは常に空であり、
様相は無い。」

や、その如く、

「生れ死ぬとなろうとも、生は無く死は無いと、知ることになる者は、
この禅定を得ることは難しくない。」

と説かれたことや、その如く

「思い量れぬこの諸法を知る、それらの人々は常に楽である。法と非法
の分別（概念作用）は無く、一切は心が発したものによって分けられた。
一切は計り知れず、一切は生起するのではないので、事物と無事物であ
ると知ると知ることは尽く滅す。心に操られる幼子達、彼らは百千万の有（輪
廻）を苦しむ。」

と説かれた。

時は果が生起し失壞する因であることを否定する＞ [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「生起と壊を考察する」という第二
十一章の解説である。